

高岡典男「神々の庭園」

文：ロレンツォ・ボニーニ

世界中の他のどの文明とも違う文明をもったこの一握りの列島は、かつて「世界の果ての帝国... 日の出ずる国」と呼ばれていた。仏教に基づくインドアジア系文化とのつながりはあるものの、日本の芸術は西方からやって来るものの全てを変容させ、何かが沈殿するように静かに物の単純なありかたをある絶対的な形で実現していた。日本芸術は全世界の近代美術に切っ掛けを与えたとも言えるし、特に印象派、後期印象派、モダニズム、アール・ヌーヴォー、フロレアーレ、ユージュントスタイルその他にも深い影響を与えた。数世紀の間、日本は世界が進めていたゆっくりとした進歩の流れから身を引くことで必然的に墮落と妥協をもたらす近代化を拒絶していたから、ようやく1853年になってペリー提督率いる米軍艦隊の武力の前に屈してはじめて、西欧化することになったが、それにあたって「野蛮な物質主義、卑しく有害なエゴイズム」に染まってしまう自らの運命を冷静に悟っていた。日本芸術は「武士道」の概念や、万物を統括し、また万物がそこへ回帰する自然に無条件で参加することなど、その表現の中に特に倫理的価値観を見いだして来たと言える。

真の日本の芸術という物は風景から来ており、また風景に参加することにあると言っても良いだろう。風景を見つめることは、常に日出ずる国（大和）の芸術の基本形であった。日本人にとって富士山とその絵、厳島とそれを描いた版画は、芸術品として同等な価値を持っていたのだ。自然とそれを描いたものの間に差異はなかったのである。しかし彼らの芸術を理解するには、それを包み隠す周囲の自然との間に一切対立を設けない特殊な建築の趣味とも通ずることだが、一見かけ離れた価値同士がとても似通っているということも忘れてはならない。

物質的な快樂とより純粋な神秘主義がそこでは全く共存するのだ。宗教的な規則に一切無関心であることと深い宗教性との間に、何かある同質のものがあるのだ。それは全ての宗教が互いに似ているのと似ているほどだ。出雲や伊勢の神社に代表される神話的で自然な神道と禅のもつ瞑想的抽象性、さらに永平寺の寺院の間に近親関係があるのだ。どちらも無条件にひたすら自然を崇拝する。こうして見ると、日本はある宗教的パラドックスとでも言うべき物を具現して来たようにさえ見える。このパラドックスは、高度な技術によって宗教的、世俗的権力を描き出すことをして来た西欧古典の芸術とは違って、日本の諸芸術を至上の美の概念に昇華することで、その芸術的な質に大きな影響を及ぼして来たのである。

高岡典男はこの感情を心の深い所で体験している人で、それを献身的に育みながら、そのことを彫刻作品として極めて厳格な形で見せてくれる。『FIORE』、『SEMI GIGANTI FUORI MISURA』を見てみよう。法外な（FUORI MISURA）寸法は勿論狙ってのことである。自然の宗教的な神聖さをその偉大な連続性に於いて強調したかったのだ。また当然、彼の伸び伸びとした創造性、そしてそこに見える意図的な目配せも同様に人を惹き付ける要素になっている。まず何よりも殆ど遊戯的

とも言える自由さを持ちながら高岡典男の作品はすぐ見分けがつくような簡単なタイポロジーには納められないものを持っている。彼の彫刻は、造形的な純粹さ、そして内面的な熟練と象徴性への愛情をもって素材を扱う時の敬意の心に特別な配慮を払いながら作られている。つまり、寸法に対する気持ちを含んだ意図が少なからず込められた造形物として読まれるべき作品なのだ。80年代初期に作られ、その後重要な美術館その他の公共機関（旭川市立彫刻美術館、新潟近代美術館、埼玉近代美術館など）によって購入された一連の巨大なモニュメント作品を通してはっきりと顕現し始めたある問題意識がそれら全体から灰めかされている。中でも東京都のためのモニュメント数点（高さ10m 近く）、モールのモニュメント等が特に大きい。またそこに込められた意図には、やや人をはぐらかす所さえある。日常的なものについて日頃我々が抱いている意識のように、我々に触れるものの隠喩的なイメージにまつわる因襲性をよしとしているのではないかとさえ思わせられてしまうのだ。

従って高岡は、例えばかつて書院造りという建築や、結崎座を元祖とする能、古い伝統儀礼である茶の湯、これも伝統の生け花などがそうであったような意味で、現代の代表的な記号と言えるものを現代芸術の創造のプロセスの中、寓意的な表題『神々の庭園』を掲げ、素晴らしいフォームのシンプルさに特徴づけられるこの個展において我々に暗示し、指し示してくれる。刀の刃も複雑で宗教的とも言える儀礼に従って製造されると言う。感情面も完全に注がれるだけに本当の芸術作品と見なされているのだが、それに似て至高の美に昇華させんとする彼の芸術の宗教的奇想天外さに溢れた物語性に打たれるはずだ。高岡にとっても彫刻を制作することは、難解な予言と明晰な理性の狭間で謳われるある出来事を叙事的に呼び覚ます行為である。そのある部分は、直感から論理へ、神話から言語へという知の進歩の段階で見られるようにまず解読不能な形で暗示される。物質、観念、記憶などが現実と夢のように一つになって、今日ではその中で夢を見ようとする必要があるような、そんな感覚の調和ある表現として溶け合う。彫刻の至高の限界を夢見ること、歴史からその一片をむりやり抜き取り、ピンダロスのようにそれを呼び出すことが出来るか。快樂と破滅の間で、自覚を持った存在の詩学とただ徹底的に人間であると言う幻滅の間で苦悩に苛まれながら、水面から太陽が立ち上るのを夢見ることが。